# ぼんやりシュリハンドク

掃いても掃いても落ちてくる山のような木の葉を、シュリハンドクはもう何時間も箒を握って掃き浄めていました。ここは祇園精舎、大勢のお弟子たちが集まって来て、お釈迦さまのお説法を聞く道場です。誰もがすがすがしい気持ちで、お説法を聞けるように道場はいつもきれいにお掃除が行き届いています。シュリハンドクのお蔭です。でも、大勢人が集まると、どうしても汚れてしまいます。シュリハンドクは朝から晩まで、お掃除の手を休めたことがありません。

シュリハンドクは可哀そうに、生まれついての智慧おくれです。それも大分ひどい智慧おくれでした。何しろ自分の名前だって覚えられなかったのですから……。人から名前を呼ばれてもボンヤリしていて返事もしません。誰かに注意されてやっと自分が呼ばれていることに気が付くくらいです。

---

*祇園精舎　須達（スダッタ）という長者（大商人）が祇陀太子（ジェートゥリ）の所有していた園林に建てた僧侶のための舎屋。舎衛城（シュラーバスティ）の南にあり、王舎城（ラジギール）の竹林精舎とともに二大精舎といわれ、お釈迦さまのご説法も多くこの二箇所でなされた。もとは七層の建造物があって荘厳を極めたが、玄奘三蔵が訪れた七世紀頃にはすでに荒廃していた。精舎は、寺院の異名。

そのようなわけで、小さい時からいつもいじめられッ子でした。棒でつつかれたり、ツバを吐きかけられたりしていました。いつの時代にもいじめッ子っているものですね。

シュリハンドクは自分の名前さえ覚えられないくらいですから、何を教わっても片ッぱしから忘れてしまいます。ついには教える人は張り合いがなくなって誰も教えてくれなくなりました。誰にも相手にされなくてシュリハンドクは、いつも一人ぼっちでした。

お釈迦さまが祇園精舎でお説法をなさることを聞いた修行者たちにまじって、どうしたことか、いつのまにかシュリハンドクが座っているようになりました。相変らずボンヤリとした顔で一日中座っていました。お説法を聞いても、分っているのか分らないのか、皆で自分たちの考えたことを話し合っているときも、ただ黙って座っているだけです。あまりボンヤリした顔をしているものですから、ついからかいたくなったのか、

「オイ、シュリハンドク、お前のように頭の悪いヤツは、いくらお説法を聞いても無駄だ。帰れ、帰れ」

「一番早くから来て座っているのだから少しは分ったか、分ったら話してみろ」

などと意地悪を言う人も出てきました。何を言われてもからかわれても、シュリハンドクは、ただニヤニヤ笑っているだけでした。お釈迦さまのそばにいるだけで、何となく安心した気持ちになっているのです。難しいお話の意味は分らなくても、お釈迦さまのお声を聞くだけで涼しい風が体の中に流れ込んでくるようでした。優しい目でこちらをご覧になると、それだけで美しい光がさし込んでくるような気がしました。ほかのお弟子たちに意地悪を言われようとからかわれようと、毎日シュリハンドクは何かに引きずられるように道場に来て一人きりで座っていました。

そのような姿をお釈迦さまは遠くからジッと見ていらっしゃいました。ある日、シュリハンドクをそばにお呼びになり、こう言われました。

「シュリハンドクよ。お前はこの道場の掃除の番をしなさい。皆が気持ちよく集まってこられるようにすることも大事な仕事だよ」

それからのシュリハンドクは、朝から晩まで箒を手放すことがありません。初めは掃除も下手でしたが、そのうちにだんだん上手になってきました。シュリハンドクが掃いた所は、いつまでも箒の目がついていました。水をまくとサーッと涼しい風が起こって、皆は本当に気持ちよくなりました。

そのうちにシュリハンドクが何か口の中でブツブツ言っているのに人々は気が付

2. ぼんやりシュリハンドク

きました。何をブツブツ言っているのだろう。お掃除ばかりさせられているので、とうとう文句を言い出したのか、自分ばかり働いて損していると思っているのか、などと噂し合いました。もともとハッキリしないシュリハンドクのことですから、言葉もなかなか聞きとれません。

「なんだか……ゴミがどうとか言ってるゾ。……アカがどうとか言ってるゾ」

「やっぱり掃除が厭なんだ。飽きてしまったんだ」

わけの分らないことなので人々は余計に気になって、ああでもない、こうでもないと、ワイワイガヤガヤ話し合いました。けれどもシュリハンドクは人々の声などまるで気にしないで、というよりも周りに気を遣うようなこともできないほど、気がきかない性格だったのかも知れません。相変らずブツブツつぶやきながら一日中お掃除をしていました。

そのうち、お弟子の中でも落ち着いた徳の高い人が、耳を澄ましてシュリハンドクの声を聞き分けました。そのお弟子はビックリして自分の耳を疑いました。

「心のアカを洗い流そう。心のゴミを掃き出そう」

何とシュリハンドクはこの二つの言葉を朝から晩まで口の中でつぶやきながら、お掃除をしていたのです。あのボンヤリの、馬鹿だノロマだと皆にからかわれてい

たシュリハンドクが、このように大事なことを覚えてしかも実践していたのです。そのお弟子はすぐに長老と呼ばれる人に報告しました。長老もビックリしました。

「何とそれは、お説法を聞く者の一番大切な、*懺悔のことではないか。お弟子として一番大事な心構えがあのシュリハンドクに分っていたのか」

長老はすぐ、お釈迦さまにお話ししました。お釈迦さまは少しも驚かれず、ただニッコリお笑いになっただけです。お釈迦さまには何もかも分っておられたのです。お釈迦さまのお教えを守って、一心にお掃除をするうちに、シュリハンドクの心の中から修行の妨げになるゴミやアカが、いつのまにか洗い流されてきれいに耕された畠のようになっていたのです。そこへお説法を聞けば、よく耕された土に立派な種子が蒔かれ、太陽や雨に助けられて見事に植物が育つのと同じことです。

智慧おくれでお説法の内容がよく分らなくても、一生懸命信じて修行しているうちに、一番大切なことが知らず知らずのうちに身についていたのです。こういうことを「*法門毛孔より入る」と経文に書いてあります。落ちこぼれの劣等生が満塁逆転ホームランをかっ飛ばしたようなものですね。懺悔をなし終わったシュリハンドクは、それからも怠らず修行に励みました。そして、多くの優れたお弟子たちの中から選ばれて*記莂を受け、普明*如来と呼ばれるようになったということです。

---

*懺悔　自分の犯した罪を仏の前で告白して、悔い改めること。

*法門毛孔より入る　宗教的な環境に身を置くと、自然に仏法が心に染み込んでくること。仏法は仏の智慧に到達するための門であるからこれを法門ともいう。

*記莂　仏が弟子に対して今の決心を持ち続けて修行すれば、将来は仏と成ることができると予め与えるところの保証。これを仏が授けることを授記といい、弟子がこれを受けることを受記という。

*如来　仏のこと。真如(真理)に乗じて来至する者という意味で如来という。仏の名の下に付けて釈迦如来、大日如来、阿弥陀如来などという。